



平成 27 年 12 月 28 日

各 位

会 社 名 株式会社 新日本科学  
代表者名 代表取締役会長兼社長 永田 良一  
(コード番号：2395 東証第一部)  
問合せ先 代表取締役副社長 関 利彦  
(TEL：03-5565-6216)

### 緑内障モデル及び加齢黄斑変性モデルの薬効薬理試験の受託開始に関するお知らせ

当社は、平成 26 年 7 月 1 日付で岐阜薬科大学と共同研究契約を締結し、同学 薬科学科 生体機能解析学大講座 薬効解析学研究室 原 英彰教授と共に、眼疾患病態モデルの確立に関する研究を進めてまいりました。その成果として、サルを用いた緑内障モデル及び加齢黄斑変性モデルの薬効薬理試験の受託を開始致しましたので、お知らせいたします。

病態モデルの確立にあたっては、原教授のご指導の下、世界でも評価の高い当社の病理組織学的検査を含め、これまで毒性試験で積み上げた既存のノウハウに新たなイメージング機器である光干渉断層撮影装置などを組み合わせました。

緑内障及び加齢黄斑変性は失明原因の上位疾患に位置し、両疾患ともに人口の高齢化に伴い、中高年を中心に日本のみならず世界規模で患者数は増加すると予測されております。緑内障については多くの眼圧下降薬が上市されており、臨床で効力を発揮しておりますが、近年では眼圧下降のみを目的とした緑内障治療薬ではなく、神経保護作用を有する新しい機序の緑内障治療薬の研究開発が進んでおります。また、加齢黄斑変性については、いくつかの生物製剤が上市され、臨床で使用されていますが、本邦のみならず世界の製薬企業が既存薬とは作用機序の異なる新しい医薬品の開発を進めております。

このような環境下において、これら 2 つの病態モデルを用いた薬効評価を実施できる受託試験機関は国際的にみても非常に少なく、当社が確立した 2 つの病態モデルは、眼科周辺の解剖学的特徴がヒトと類似したサルを用いたことで臨床への外挿性の高い薬効評価モデルとして国内外の多くの製薬企業から期待と関心を集めております。特に加齢黄斑変性は iPS 細胞や ES 細胞等を利用した再生医療の適用領域としても想定されている疾患のため関心が高くなっております。

なお、これらの疾患はヒトでは症状が重篤化すると視機能に影響を及ぼす可能性がありますが、サルの緑内障モデルは片側のみに高眼圧を誘導し、反対側は無処置とします。また、加齢黄斑変性モデルでは視機能の中心的役割を担う黄斑には傷害を与えていないことから、両モデルとも視機能を維持しております。当社は 2011 年に AAALAC International (国際実験動物ケア評価認証協会) より認証を取得し、その後も完全認証を継続しており、これらの病態モデルも動物福祉に十分な配慮をしております。

当社はこれらの新規の病態モデルを製薬企業に提案することにより、緑内障及び加齢黄斑変性に対する新薬開発をサポート致します。

なお、現時点では、今期業績に及ぼす影響は軽微であると見込んでおります。

以 上